

長期間義歯不使用の患者に対し義歯を新製した症例

First complete dentures for a long-time edentulous patient

尾崎 洋美

Hiromi Ozaki

Keyword : patient oriented dentistry, complete denture, edentulous, food test

キーワード: 患者中心医療, 総義歯, 義歯不使用者, フードテスト

New complete dentures were made for a patient who had spent a few decades without teeth or dentures. At first the patient showed aversive to wearing dentures partly due to discomfort and appeared skeptical about improvement in chewing ability. An array of food tests along with chewing training, however, helped the patient regain confidence and in turn widened the variety of foods she enjoys. This case highlighted the importance of continuous use of dentures and effect of chewing training. 【顎咬会誌 36(1・2): 80-81, 2016】

【症例の概要】

患者: 75 歳女性

主訴: 入れ歯を作りたい (来院を促した家族の希望でもある)。

患者は何十年間も無歯顎で生活しており, 義歯の使用経験はない。「顔がくしゃっとしているのがわかってから, 顔を見たくなくて何年も鏡を見ていない」ことから, 初診時は顔貌の写真撮影の許可はとれなかった。息子に義歯の新製を半ば強制されて渋々来院した。

口腔内所見: 下顎前歯部に残根がある。上下顎とも顎堤の状態は良好であった。

【治療経過】

残根歯を抜去後, 上下総義歯を新製しバランスドオクルージョンを与えた (河原英雄先生推奨のリマウント調整法による)。フードテスト時は, 柔らかいものならば大きく開口しても食べられるかもしれないと思い, いなり寿司を食べてもらったが, 義歯を上手く使えず, 再三「飲み込みにくい, ほっぺに食べ物が入まる」と不満を訴えられた (動画 1)。

患者によると, 義歯を装着しないまま「何でも食べていた」という。実際, 義歯なしでリンゴを食べてもらったところ, 細かく砕けており飲み込みもスムーズで, 義歯装着時よりも, 食べやすそうにみえた (動画 2)。

ただ, 患者も家族も口元を気にしている様子だったので, 見た目のためだけでも義歯を装着するよう伝えた。また, 「痛くなったら来て下さい」と伝えても再来院は望めないため, その場で次の予約を入れていただいた。

丸尾歯科医院 〒874-0935 大分県別府市駅前町 12-11
Tel: 0977-23-3471

受付日: 2016 年 2 月 10 日 受理: 2016 年 3 月 25 日



動画1 セット時: 義歯の使用に慣れない様子で, 「かんでると外れそう」と話す様子。この時点では義歯にばかり意識がいき, 稲荷寿司を食べることができなかった。



動画2 義歯無し: 普段通り義歯なし食べていただくと, 「歯茎で」リンゴのスライスが無理なく飲み込める大きさに砕けていた。

義歯新製後 1 週間: 再度フードテストを行うと「飲み込みにくくて, 外食時に時間がかかる」「ほっぺに食べ物が溜まる」ため, ついつい義歯を外して食べてしまうとのこと。外食時に義歯を入れるのは「歯がないとみっともないから」という。今まで何十年も, 歯がない状態で過ごしてきた患者の意識に変化がみられた。できるだけ早く義歯に慣れるように歯科用ガムでのトレーニングを勧めた。



動画3 義歯新製後2カ月 (リマウント調整後): セット時に稲荷寿司が食べられなかったことを忘れるほど義歯への違和感はなく, 硬いもの以外は前歯でもかめるようになった。



動画4 義歯新製後3カ月: この2カ月前には1/8スライスに躊躇していたが, リンゴの丸かじりにも積極的に挑戦するほど, 飲んで食べることに意欲が高くなった。

義歯新製後 1 カ月: 痛みのある箇所を調整し, 再度フードテストを行った。「だいぶん慣れたのかな」という患者の言葉どおり, 咀嚼から嚥下までの一連の動作がセット時と比べ円滑になった。

義歯新製後 2 カ月 (動画 3): ふっくらした様子なので本人に確認したところ, 体重も直近の 1 カ月間で 2 キロ増加したとのこと。また, テストフードのいなり寿司は, 食べられるようになっていたことから, セット時に食べることができなかったことを忘れていた様子であった。「これは食べられん」と断念していた海苔巻きもリマウント調整後には食べられるようになっていた。この時点では, 煎餅やピーナッツなどの硬いものは奥歯ではかめるが前歯ではかめない。

義歯新製後 3 カ月 (動画 4): 診療時での会話でも「白髪を染めたんよ」「今まで使ったことなかったけど美容クリームを買ったんよ」と自分から楽しそうに話され, 口元だけでなく外見に気を遣うようになった様子が見えた。また, 口元の調和も改善していたので, リンゴの丸かじりに挑戦していただいた。その後「丸々一個食べられるわ」と言って食べかけのリンゴを嬉しそうに持ち帰る姿が印象的であった。

義歯新製後 6 カ月: 電話にて最近の様子を確認すると, 「嬉しくてピーナッツをたくさん食べていたら栄養士をしている息子の嫁に怒られた」という報告からも, 食事への意欲が初診時から大きく改善したことが確認できた。

その後: 白内障の手術に伴う入院などで, 来院が途切れている。

【考察】

長期にわたり無歯顎で特に不自由を感じることなく生活していた場合, 本人の義歯装着意欲も低く, 違和感も大きい義歯の継続的な装着が期待できないことが多

い。本症例でも, 義歯を装着していない方が食べやすそうにしていた。患者もこの時点では, 咀嚼機能の回復については懐疑的であったと考えられる¹⁾。

本症例におけるキーポイントは患者の生活背景を知り得たことである。この患者の場合, ご主人を亡くされたばかりで息子さん家族との食事が今後の楽しみになるであろうと考え, 筆者も継続的な観察を積極的に行うことで患者のモチベーションアップを図った。幸いにも外見の変化が動機となり, 少しずつ義歯装着の機会が増えたことが, その後の咀嚼機能の回復のきっかけとなった。つまり, 義歯を装着して日常生活 (食べる, 話す) をおくるという習慣が, 結果として機能回復に繋がったと考えられ, 継続的に使用することの重要性を再認識した。さらに本症例でもそうであったように, 患者自身が「食べられない」と思い込んでいる食べ物をフードテストで試すことは, 何をどれくらい食べられるのか患者自身が気づき, 確認する機会となる。このようにフードテストは義歯による機能回復の客観的評価に加えて食事の幅を広げる重要な役割を果たす。

【結論】

長期間義歯なしで過ごしてきた無歯顎者に新義歯を調製した。義歯の継続使用が義歯を受け入れるために有効であることが示唆された。長期的にみると, 食べられる喜びから食事への意欲が増す時期もあれば, 環境変化や口腔以外の不調からその意欲が失われることもある。患者の変化に気づき, フォローするためには患者の性格や生活背景を知ることが重要であり, 歯科医院, 患者, 家族などの連携が今後の課題である。

参考文献

- 1) 森 宏樹: 補綴処置が高齢者の日常生活活動 (ADL) に与える効果, 補綴誌, 43: 37-47, 1999.